本の紹介

蒲生俊敬著「海洋学者, 海の文学を愉しむ」岐阜新聞社, 223p，2026 年 11 月 19 日発行
1,500 円（税別），ISBN978-4-87797-358-2

著者は『海洋の科学』（NHK 出版）や『海洋地球化学』（講談社）などの著書のある現役の海洋学者である．このたび，著者の好きな，海に関係する文学書を渉猟し，海洋学者の視点で紹介している．本書は，まるで「海という名のご馳走集」のようで，大変美味そうなたくさんの献立が並んでいる感じである．材料は古今東西の文学作品である．引用された文学書それ自身がとても素晴らしいものばかりである．だから，どのような味付けをするかが，海洋学者の勝負どころである．

引用された文学書は下記のように多様である．あえて，著者だけを並べてみる．カーソン，島崎藤村，夢野久作，吉村昭，池田宏親，近藤啓太郎，伊与原新，西村寿行，寺田寅彦，吉川英治，北原多作，島尾敏雄，ポオ，玉岡かおる，司馬遼太郎，高田宏，森崎和江，津本陽，ウォーク，井出孫六，高橋泰邦，スタインベック，宇田道隆，北杜夫，新田次郎，ヘイエルダール，海部陽介，リュートゲン，角幡唯介，ビービ，ピカール，アール，ドーヴァー，ルピション，小林和男，新延明，ヴェルヌ，ドイル，小松左京，シェッツィング，モラン，ストーリーパーなど，４５名を超える．そのほかにイシグロも出てくる．ああ，あの作品だとわかる作家は何人いるだろうか．あまりたくさんはいないはずだ．私たちは文学作品に海をあまり意識して読んでいないということなのだろう．全作品を各章のタイトルのように「海，そして海流」「潮の流れと渦潮」「古代より人や物質が行き来した日本周辺海域」「牙をむく海と海難」「冒険・探検・航海記」「潜水調査船や潜水艦」「SF」に分けて，著者は紹介している．

読んでいくと「へえ」と思うことがたくさん出てくる．レイチェル・カーソンが海について書いているなんて知らなかった．俊寛の流された喜界ヶ島から卒塔婆を流したら厳島に流れついたとか，漂流瓶の実験をした研究者がいたり，潜水艦が黒潮の蛇行で流されたり，まったく知らなかった逸話が次から次へと登場する．戦争や軍に関わる話は興味深い．アールやドーヴァーは女性研究者を紹介している．戦争や外交や事件にかかわる話はドキドキする．殺人事件を解いたり，高田屋嘉兵衛のロシア外交を追ったり，帝国海軍や米国海軍も海に翻弄されたりしたらしい．第 2 次世界大戦末期の潜水艦の実態の紹介もある．洞爺丸事故にも筆者はメスを入れている．観測船に乗り込む人々の生活を記録している航海記や小説も紹介している．などなどと続く．

各章の終わりにコラムがついている．これが一番面白い．「『黒潮』の語源」、「神話に登場する海流や潮汐」、「太平洋戦争終結間際に検討されていた『海流輸送』」、「名作に散見される，海流への認識不足」、「海の和歌」など．「海流輸送」とは，台湾の北で投入した漂流瓶は日本沿岸のどこかに流れ着くことが多いし，朝鮮半島東岸から流した漂流瓶は日本海沿岸のどこかに流れ着くと言われていたので，日本本土で欠乏している物質を台湾や朝鮮半島から放流すればよいと考え，実行しようとした，風船爆弾のような話である．「海流への認識不足」のコラムは，黒潮などの流域の解説に誤りが多いことを著者は指摘している．誤謬を見つけよというクイズや試験問題にしても面白いだろう．

本書は話題満載である．地学の授業で海の話をするときに本書を虎の巻にすると学生にとってもおもしろいのではないだろうか．

なお，著者が岐阜高山と縁が深いので，本書は岐阜新聞社から出版されている．

（東京都立大学　矢島道子）

2026.11.5 受付
2026.11.17 学会ニュースレーター公開
2026.11.17 学会ホームページ公開